

28. 災害救護における理学療法士としての取り組み

岡山赤十字病院 リハビリテーション科

○畑 ^{はた} 賢俊 ^{まさとし} 小幡 賢吾 片岡 昌樹 小西池 泰三

【はじめに】

平成23年3月11日に起こった東日本大震災にあたり、当院では救護班として被災地での救護活動を継続的に行っている。今回、私は3月28日から4月1日までの5日間、救護班の一員として救護活動に参加する機会を得た。現地入りした当初は主事としての役割であったが、現場での状況から同行医師より、理学療法士として出来る事をするよう指示され専門職としての活動を行うことができた。今回、理学療法士からの視点で見た被災地の状況と問題点、また実際に行った活動内容を報告する。

【活動経過】

当院では地震発生当日より救護班を出動。我々は第6班として3月28日に岡山を出発し、3月29日から岩手県山田町にある「陸中海岸青少年の家」の避難所を拠点として救護活動を行った。同行した職種としては、医師2名、看護師3名、私を含めた主事3名であった。今回の震災被害の主は津波であったこともあり、残念ながらお亡くなりになるか、軽傷である患者が多く、我々が到着したところには外傷などの急性期治療の必要性は減少していた。そのため救護活動としては、拠点の避難所での診療以外に、大浦半島内3か所の避難所の巡回診療や、個人宅への訪問診療なども行うようになった。3日間にわたり救護班として活動。4月1日岡山に戻ることになった。

【理学療法士としての活動】

医師の指示のもと、拠点の避難所では集団での健康体操、肩こりや腰痛などの慢性疼痛疾患

に対するセルフケア指導、日常生活指導、深部静脈血栓症のチェックと運動指導などを実施。変形性関節症や肩関節周囲炎の悪化が認められる方には治療、運動指導を行った。また巡回診療に同行し、避難されていた片麻痺患者への治療、介助者への助言。自宅で寝たきりとなっている患者に対し、褥創チェックとポジショニング。家族に対し体位変換や飲食時のポジショニング指導等を行った。

【今後予測される問題点】

長期にわたる避難所での生活では、生活様式がベッドではなく床上であるなど、様々な要因から動作が制限される。そのため廃用症候群や深部静脈血栓症の発症が考えられる。また施設入居していた避難者を、突然家族が介護するため、対応に苦慮するケースも見受けられた。地域の避難所では、若者がいないため、高齢者も労働に参加する必要がある、そのため慢性疼痛や身体・精神面へのストレスの増大などが予測される。

【まとめ】

今回の災害では、急性期医療よりも慢性期疾患に対する医療が早期から要求されていた。今回我々はそれを認識し、早い段階からリハビリテーションを含めた医療の介入を行うことで避難者のニーズに対応できていたのではないかと感じられた。

最後に、東日本大震災の被害を受けられた皆様に謹んでお見舞い申し上げます。被災地の日も早い復興をお祈り申し上げます。